研究ノート

聴覚障害児を対象とした音楽教育研究の動向
―近年の研究論文のレビューを通して―

甲斐　万里子*

Trends in music education research with children with hearing impairment
―Through a review of recent research papers―

Mariko KAI*

【要旨】
本研究は，聴覚障害児を対象とした近年の音楽教育研究の動向を概観し，残されている課題を見出すことを目的とする。2014 年から 2024 年現在までに発表された研究論文を対象にレビューを行った。その結果，「聴覚障害と音楽認知の関係」「指導法や教材の開発，改善」「音楽活動に向かう聴覚障害児の内面」を関心の中心として研究が発展してきたことが分かった。レビューを通して，聞こえや音楽の享受における個人性や個人差への重視と，それに基づく指導法や教材，手がかりの開発が特に発展途上であることが分かった。今後は，個人差や個人性を重視することと，音楽を愛好する子どもの心情を育むことに向け，視覚情報や触覚情報をバランス良く活用することとの共存が可能となるような実践の報告が待たれる。また，聴覚特別支援学校等で聴覚障害児と日々向き合う教師らによる研究報告が多くないことから，研究者との連携や発表の場の構築も課題として挙げられる。

キーワード：聴覚障害児，音楽教育，音楽認知

1. はじめに

本研究は，聴覚障害児を対象とした近年の音楽教育研究の動向を概観し，残されている課題を見出すことを目的とする。近年，音楽教育との親和性の高さから関心が高まっているウェルビーイング（well-being）を視点とした研究，そして，同様の問題意識から発展が求められているインクルーシブな音楽教育を視座とした研究が増加傾向にある。中でも，聴覚障害児・者を対象とした関心の高まりは一段と顕著な印象がある。聴覚を通して音響情報を知覚，感受することに重点が置かれる音楽教育において，聴覚に障害がある誰もがその教育的効果を得られるようにすることに一層の工夫が必要だとされている社会的な要請が見て取れる。

科研費のデータベース[1]で，検索窓に「聴覚障害」「音楽」と入力しただけでも，1983 年以降に開始された研究で 127 件ヒットする。件数で言えば，2012 年以降に急激に伸びており，2024 年現在までに開始されたものが 62 件ある。つまり，半数近くが近年になって着手されていることが分かる。検索ワードを「聴覚障害」「音楽教育」にすると，開始年度が 1999 年からになり，11 件のみになる。それでも，2009 年以降に開始された研究が 8 件を占める。この数字だけを見ても，well-being が示された

＊　かい　まりこ　和洋女子大学人文学部こども発達学科

タイミングとの一致と，それを境として，聴覚障害児・者に対しての音楽的なアプローチに改善するべき課題があるとして，喫緊の課題に据えられたことが推察できる。2024 年現在，聴覚障害児を対象とした音楽教育研究は，2010 年前後から勢いが増して以来，10 年余り経っていることになる。そこで本研究では，一定の知見の蓄積が見込まれる今のタイミングで研究動向を整理，概観することで，聴覚障害児を対象とした研究の成果および今後克服が待たれる課題を見出したい。

2. 結果

2.1. 分類結果

Cinii[2] で「聴覚障害」および「音楽」を検索ワードとした検索の結果，2014 年以降 2024 年までに，38 の研究論文が示された。そのうち，同じ論文が複数の表記で示されていた 4 点を除き，学会誌論文のみを抽出した 27 点が本論文の対象である。これらの論文の問題関心を分類した結果，「聴覚障害と音楽認知の関係」「指導法や教材の開発，改善」「音楽活動に向かう聴覚障害児の内面」の 3 つに分けることができた。次項から，関心のまとまりごとに研究動向を追い，今後の課題と展望を見出したい。

2.2. 聴覚障害と音楽認知の関係

聴覚障害と音楽認知の関係に迫ろうとしている研究には，大人や子どもを対象に，聴覚障害と諸能力の関係について，そのメカニズムを解明しようとしている研究（林田 2015，能登谷 2018，栗岡 2021）が発表されている。教育により関わりの深いものでは，補聴器や人工内耳を使用する聴覚障害児・者を対象に，ことばや音楽の聞こえの実態を調査したものが多い（小渕 2021，田原ら 2020 など）。大人を対象としている研究は，質問紙調査や実験を通したものが主流で，子どもを対象としたものだと，実験的な手法を用いているものが多い。中川（2022）は，ことばと音楽の聞こえの実態を質問紙調査を通して明らかにしている。調査の結果，音楽の聞こえ方について，補聴器の装用状態がことばの聞き取りには影響するものの，音楽には有意な効果を及ぼさないことが示唆されたと述べている。松本ら（2020）は，聴覚障害者のメロディ認知能力の特徴を，音楽経験や個々の音楽関心との関連性から明らかにすることを目的とした研究を行っている。聴覚特別支援学校の高等部に通う生徒 17 名および 7 名の聴覚障害学生を対象とした実態調査およびメロディ弁別課題を実施した結果，音楽聴取頻度や音楽経験の有無，音楽要素の中でのメロディ重要度の 3 つの群いずれとも関連性を見出すには至っていない。関連性が認められなかった要因として，音楽経験の内容のばらつきや学習能力や記憶力の差を十分に統制しきれなかった点を挙げている。また，大金ら（2022）は，人工内耳を装用した後天性聴覚障害者と先天性聴覚障害児の音楽知覚能力を比較している。28 名の成人と 34 名の子どもを対象に，ピッチ識別，ピッチパターン識別，旋律識別の 3 つの課題を実施している。その結果，子どもは大人よりもピッチやピッチパターン識別が優れていたが，旋律識別は両群とも困難だった結果が示されている。大人はリズム内で誤答する傾向が見られ，リズム情報を活用していると推測される一方で，子どもでは誤答の傾向が一定でないことから，旋律の識別にリズム情報を活用できていない可能性が指摘されている。

この研究でも課題として示されているように，個人差が大きく，統制や分析の精度を一定以上にすることが困難な実験や実践が多いなか，専門的な見地から精緻な実験を行い，重度の聴覚障害学生の歌唱活動における内的フィードバック能力の獲得過程を明らかにしたのが小畑（2022）である。この研究は，先天性の重度感音性難聴を持つ大学生を対象に，歌唱指導セッションを通じて内的フィードバック能力（自分の音高・音程が合っているかの認知）の獲得過程を探っている。72 回にわたるセッションで歌唱指導を行い，音高や音程の合わせ方や内的フィードバック能力の向上を記録している。研究では，セッションをフィードバック導入期，萌芽期，発展期，充実期に分け，各段階での変化を追っている。本研究は，視覚情報を活用した指導法や対象者の認知に基づいたアプローチが内的フィードバック能力の向上に効果的であることを示している。また，歌唱を通じて対象者が自己肯定感を得られるようなプロセスの重要性を強調し，聴覚障害者への教育的配慮の必要性も提言した。

視覚情報を活用し，歌唱のサポートを行おうとした研究には，黒川ら（2021）もある。この研究は，聴覚障害者が幼稚園・保育園の教員資格試験で求められる弾き歌いにおいて，自身の声が聞こえないために難易度が高くなる現状の改善を目指したものである。演奏者は咽喉マイクを装着する。咽喉マイクを通して入力した音響信号をもとにピッチ検出を行

い，その音程を電子キーボードの LED に表示するシステムを開発した。

これらの研究は，どの時期に，いかなる音楽経験を積み，音楽指導を受けることが，音楽的な技能のスムーズな習得につながるのかや聴覚障害児・者が楽しんで音楽活動に取り組める鍵がどこにあるのかを解明する糸口になるものと言えるだろう。特に，人工内耳と補聴器のどちらを装着しているかでの音楽認知の違いへの言及もあり，そうした知見は，音楽科の授業者が配慮事項を検討するための大きな助けになることだろう。

聴覚レベルと聞こえの関係に焦点化し，傾向を掴もうとした研究に対して，音楽認知の個人差に着目したのが松原ら（2022）である。この研究では，聴覚障害と音楽認知について，先行研究を挙げながら解説している。特に，聴力レベルがそのまま音楽聴取能力になるわけではないということを改めて強調し，聴覚障害と音楽が相入れない要素ではないことを確認している。「身体化された認知」という概念が各分野と関連づけられて久しく，人が，「スナップショットや定点録音のように世界を見たり聞いたりしていない」と述べている（p. 724）。人の選択的注意によって知覚情報を取捨選択していることや，同じ情報，同じ音楽でも観点によって捉え方が変化する例を挙げて，客観的な物理現象としては同じ音であっても，人によって捉え方が異なることを予め説明している。こうした聞こえ方の個人差を前提として確認した上で，聴覚障害者の音認知に対する実験結果を示している。聴覚障害者は，同程度の聴力レベルであったとしても，音楽経験の有無によって拍の認識精度に差が生じることを指摘している（p. 727）。これらを踏まえて，松原らは，音楽経験と同等の支援が重要であるとして仮説を導き，手がかりの開発を進めている。

2.3.　指導法や教材の開発，改善

前項でその重要性が指摘されている手がかりの開発に焦点化した研究が，教育現場から報告されている。本研究で対象とした 27 点のうち，多くを占めたのがこのカテゴリである。視覚や触覚といった，聴覚以外への情報を活用した教材の開発（松原ら 2014，金箱 2014，金箱ら 2016，寺澤ら 2016，坂尻 2016，平賀ら 2018）や，音楽を学ぶのに重要な他分野の重視，そして，指導の方法への関心が中心であった。例えば山本（2017）は，「ことば」の指導の重要性を強調し，聾学校小学部における音楽科の授業実践の工夫点や配慮すべき事項を授業実践の紹介を交えながら報告している。学習を展開するために必要だと判断される言葉を見出し，的確なタイミングで繰り返し使用するような，「ことば」の指導を行い，使用語彙として定着を図ることが肝要と指摘している。聴覚障害児にとっても音楽を楽しむ気持ちは聞こえる児童と何ら変わらないとして，その気持ちを絶やさず育むために，スモールステップが重要だと結論づけている。辰巳ら（2022）は，聴覚障害者と健聴者が共に音楽を楽しむ手段として，キロノミー（グレゴリオ聖歌で使用される手ぶりの手法）に準ずる旋律線を用いるアイデアを提出している。音楽を視覚的に伝達できる点で，音楽教育への応用可能性を指摘している。松原ら（2016）は，聴覚障害者の音聴取能力向上トレーニングを目的としたタッピングゲームの開発を行っている。音楽聴取時の視覚手がかりの有無によってリズム認知能力の短期的学習効果が異なることを示し，視覚手がかりがある条件のみ短期的学習効果が統計的に有意に現われたと述べている。また，実験参加者へのアンケートやインタビュー調査も併せて行い，客観的評価および主観的評価の両方でタッピングシステムが音楽聴取能力の向上に寄与すると示唆を受けている。

視覚的な手がかりの開発にはさらに，聴覚障害者が映画をより楽しめるように，BGM の雰囲気を伝える字幕手法を提案したものある（荒井ら，2018）。BGM の雰囲気を表現する顔アイコンを用いた字幕，BGM の雰囲気を言葉で記述した字幕，そして従来の音符マークを付けた字幕の 3 種類を比較している。実験では，約 3 分間の映画を健聴者と聴覚障害者に視聴してもらい SD 法による印象評価や質問紙を用いた評価を行っている。その結果，健聴者・聴覚障害者ともに，BGM の雰囲気を字幕化することで映画の内容理解が促進されることが明らかにされている。健聴者は顔アイコン字幕によって理解が深まると感じた一方で，聴覚障害者は言葉による記述字幕の方が理解しやすいと評価したことから，聴覚障害者には，BGM に関する詳細な説明が求められる場合があるとの示唆を得ている。

観点はやや異なるが，同じ視覚的な手がかりへの着目として，手話を用いた手話歌における問題点を若林（2021）が指摘している。この論文では，手話歌における問題点を明確化し，その改善策を提案しようとしている。音楽を伝えない手話歌は，聴覚障

害者に対する差別に該当し得ると主張している。手話歌が本来の手話として成立していないことがあること，音楽を伝えられていないことがある現状を指摘し，そうした場合には，聴覚障害者が孤立感を覚える要因となると述べている。また，手話歌が政治的に利用されている可能性にも言及している。そして，手話歌を指導する際の資格やスキルの向上を義務付けるべきだと強調している。特に，教育現場での手話歌の適切な活用の見直しを提案しており，手話歌が音楽表現として成立するために，手話だけでなく音楽的な部分に重点を置くことが肝要だとしている。

以上のような，手がかりの開発における視覚への着目は，その多くが，聴覚障害児・者が，音楽スキルを向上することで，より積極的に，深く音楽を楽しめるようになるとの考えから，熱心に進められてきた。これらの研究は，手がかりとなる方法や教材，ツールを開発することで，既存の音楽の認知をサポートしようとするものと言えるだろう。このことは同時に，視覚的な情報が，理解を一定の方向に向かわせやすくしているとも言えるかもしれない。こうした観点から，音楽聴取の個人差や個人性の重要性を一層強調し，サウンド・エデュケーションの有効可能性を指摘しているのが外崎（2023a，2023b）である。聴覚障害児を対象としたサウンド・エデュケーションの実践が，子どものウェルビーイングにどのように貢献するかを検討している。従来，聴覚障害児への音楽教育が視覚的手法に依存してきたと指摘し，そのことへの批判的な立場から，補聴器や人工内耳の普及により，音を聴取できる子どもたちが増加していることを強調し，また，サウンド・エデュケーションを聴覚障害児が音に積極的に関与するための教育プログラムと位置付け，その効果を分析している。その結果，子どもたちが音を聴くことへの興味を高め，自己表現やコミュニケーション能力にも向上が見られたと述べる。これらの結果から，聴覚障害児のウェルビーイングの向上にサウンド・エデュケーションが寄与する可能性を示し，聴覚障害児への音楽教育における新たなアプローチとして，サウンド・エデュケーションの重要性を強調している。

2.4.　音楽活動に向かう聴覚障害児の内面

2.3 で紹介した外崎（2023）でウェル・ビーイングとの関係が語られていたように，音楽的発達や学習の域を超えて，音楽学習と子どもの内面の関係に対する関心が近年ますます高まっている。その多くの関心は，どのような音楽の授業が聴覚障害児にとって楽しいものなのかに現時点では集中しているようである（湯浅ら 2021）。聴覚障害児・者にどのようにアプローチすることで，音楽への積極性や興味，関心が高まるのかを明らかにしている研究には，吉田ら（2019）が挙げられる。この研究は，高度視聴覚障害を伴った重症心身障害児に対する行動の観察を行っている。研究の結果，多くの場合に補聴器の活用が困難であると判断されがちな高度難聴を合併した重症心身障害児が，補聴器を装着することについて，一定の有効性を指摘している。補聴器装用中は明らかに対象者の笑顔，発声が増加し，音源探索行動も活発となったという結果を示している。結果を踏まえ，「きこえない子」と先入観を持つことなく，生活や療育の場で，子どもの様々な音への反応を見逃さず，家族や療育者がその情報を共有していくことの重要性を指摘し，音楽療法の有用性を確認している。

森弘文ら（2015）は，聴覚障害児が音楽授業で感じる楽しさの要因を明らかにするために，聴覚特別支援学校の小学部に通う子どもを対象にアンケート調査を実施している。その結果，子どもは「楽器演奏」や「リズム遊び」などの活動に楽しさを感じており，特に，視覚的・触覚的な要素を取り入れた授業が効果的であると結論づけている。また，教師の工夫やクラスメートとの協働も楽しさを高める要因として挙げられている。この論文からは，内面的な部分を支えるためにも，視覚的な要素が効果的だということが分かる。また，狩野ら（2015）は，先に挙げたタッピングゲームの開発に加えて，印象調査としてディスカッションも行い，ゲームとすることで楽しさを生むことができることを示している。併せて，ゲーム性や難易度について改善点を見出している。

結論

本研究では，過去 10 年間の聴覚障害児・者に対する音楽教育に関する学会誌論文のレビューを通して，研究の動向と今後の課題や展望を明らかにしようとした。その結果，研究は「聴覚障害と音楽認知の関係」「指導法や教材の開発，改善」「音楽活動に向かう聴覚障害児の内面」を関心の中心として発展してきたことが分かった。特に，「聴覚障害と音楽

認知の関係」については，ことばや音楽の聞こえの実態に一定の傾向を掴もうとするものに加えて，認知の個人差に着目し，個人が音楽を楽しむための効果的な手がかりの開発の重要性を示すものとに分けられた。同様の関心から，具体的な「指導法や教材の開発，改善」に焦点化した研究が多くを占めていた。視覚や触覚への刺激により音楽の聴取をサポートしようとツールやデバイスを開発し，聞こえの手がかりとして有効であることを示した研究が多い中, より個人性や個人差を重視した指導法をウェル・ビーイングとの関係から明らかにしたものもあった。聞こえの手がかりの開発により音楽の理解をサポートするだけでなく，聴覚障害児・者の内面に着目し，楽しいと思える音楽経験や活動をどのように実現できるのかに重点を置いた研究も，数は多くないものの提出されており，指導法や研究方法の開発とともに，今後ますます関心が高まっていくような印象を受けた。

研究の概観を通して，聴覚障害児に対する音楽教育をめぐる研究は，聞こえや音楽の享受における個人性や個人差への重視と，それに基づく指導法や教材，手がかりの開発が特に発展途上であることが分かった。また，音楽の享受に，視覚や触覚への情報が一定の有効性を示している反面，その情報の伝達や指導に関心が偏る現状があること，そのことで音楽の理解，享受という本来の目的が薄まっている可能性あることも見てとれた。

以上のことから，今後は，個人差，個人性を重視することと，音楽を愛好する子どもの気持ちを育むことに向け，必要に応じて視覚情報や触覚情報をバランス良く活用することとの共存が可能となるような実践の報告が待たれる。また，聴覚特別支援学校等で聴覚障害児と日々向き合う教師らによる論文としての報告が多くないことも課題だろう。本稿で取り上げた研究の中で，キーワードとして使用されていることが多かったインクルーシヴ教育実現を目指す観点からも，まずは，授業展開における教師の困り感や情報共有の場へのニーズの解明も求められると考える。

注

1 「KAKEN　科学研究費助成事業データベース」https://kaken.nii.ac.jp/ja/ （ 2024 年 11 月 19 日 最終閲覧）

2 「CiNii（NII 学術情報ナビゲータ［サイニィ］）」https://cir.nii.ac.jp/ （2024 年 11 月 19 日最終閲覧）

引用・参考文献

荒井優希，山田璃々夏，渡辺隆行（2018）「聴覚障害者対応の映画 BGM の字幕」『電子情報通信学会技術研究報告　信学技報』電子情報通信学会，117，502，95-102.

栗岡隆臣（2021）「音響性聴覚障害における蝸牛神経と海馬の障害メカニズムについて」『Otology Japan』一般社団法人 日本耳科学会，31(3)，235-239.

大金さや香，城間将江，小渕千絵，榎本千江子，加藤秀敏，加我君孝，原島恒夫（2022）「人工内耳装用の後天性聴覚障害成人例と先天性聴覚障害小児例における音楽知覚の比較検討」『AUDIOLOGY JAPAN』一般社団法人 日本聴覚医学会，65(6)，574-583.

小畑千尋（2022）「重度の聴覚障害学生の歌唱活動における内的フィードバック能力の獲得過程」『音楽教育学』日本音楽教育学会，52(1)，1-12.

小畑千尋（2021）「オンラインによる「音楽科教育法（初等）」での情報保障の実際と課題―聴覚障害学生への支援を通して―」『宮城教育大学 情報活用能力育成機構研究紀要』宮城教育大学情報活用能力育成機構，1，1-8.

小渕千絵（2021）「聴覚障害児者における韻律情報の知覚と産生」『音声言語医学』日本音声言語医学会，62(1)，1-6.

金箱淳一，楠房子，稲垣成哲，生田目美紀（2016）「KIKIVIBE（キキビブ）―音を振動で感じる共遊楽器―」『デザイン学研究作品集』一般社団法人 日本デザイン学会，21(1)，14-17.

金箱淳一（2014）「Vibracion Cajon 2.5：視覚と触覚で体感可能な打楽器」『デザイン学研究作品集』一般社団法人 日本デザイン学会，19(1)，10-15.

狩野直哉，松原正樹，寺澤洋子，平賀瑠美（2015）「聴覚障害学生に向けたタッピングゲームの開発と印象調査」『情報処理学会研究報告［音楽情報科学］』一般社団法人情報処理学会，2014(4)，1-7.

黒川礼人，土江田織枝，山田昌尚（2021）「電子キーボードを用いた歌唱音程表示システムの検討」『音楽音響研究会資料』日本音響学会，40(4)，59-62.

坂尻正次（2016）「音楽情報処理による障害者支援：3．盲ろう者の触って歌うことを支援する―触覚

フィードバックによる音声ピッチ制御―」『情報処理』情報処理学会，57(3)，258-261.
作田佳奈美，湯浅哲也，加藤靖佳（2018）「特別支援学校（聴覚障害）小学部における音楽科授業の取り組みに関する検討―音楽科を担当する教員を対象とした質問紙調査を通して―」『筑波大学特別支援教育研究』筑波大学特別支援教育研究センター，12，83-94.
志智莉永，井坂行男（2017）「聴覚障害児に対する音楽科指導の現状と今後の在り方について」『大阪教育大学紀要　第 IV 部門　教育科学』大阪教育大学，65(2)，19-26.
辰巳花菜，酒向慎司（2022）「キロノミーに準ずる旋律線の自動推定」『第 84 回全国大会講演論文集』情報処理学会，2022(1)，485-486.
田原敬，勝二博亮，久保愛恵（2020）「聴覚障害者のピッチ弁別能とメロディ弁別能」『AUDIOLOGY JAPAN』一般社団法人 日本聴覚医学会，63(3)，206-213.
寺澤洋子，平賀瑠美（2016）「音楽情報処理による障害者支援：2．音楽を楽しむ聴覚障害者―情報処理技術でもっと楽しもう―」『情報処理』情報処理学会，57(3)，254-257.
外崎純恵（2023a）「サウンド・エデュケーションの Well-being への可能性―聴覚障害児に対する実践からの示唆―」『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会，21(34)，26-35.
外崎純恵（2023b）『インクルーシブ教育システムにおけるサウンド・エデュケーションの汎用性の検討―聴覚障害児に対する潜在能力アプローチ―』弘前大学大学院地域社会研究科博士論文 .
豊島久美子（2021）「聴覚障害のある学生への教職系音楽科目の授業方法―全ろうの学生への授業事例を通して―」『子ども研究』大阪樟蔭女子大学附属子ども研究所，12，66-72.
中川辰雄（2022）「聴覚障害者のことばと音楽の聞こえ」『AUDIOLOGY JAPAN』一般社団法人 日本聴覚医学会，65(5)，409.
中原夕夏，平賀瑠美，加藤伸子（2018）「聴覚障害者の楽器音による拍理解について―楽器音分析の試み―」『電子情報通信学会技術研究報告 信学技報』電子情報通信学会，117(502)，11-15.
能登谷晶子(2018)「加齢性難聴と聴覚認知障害」『高次脳機能研究』一般社団法人　日本高次脳機能学会，38(2)，216-221.
林田真志（2015）「聴覚障害者のリズム再生能力に関する検討」『音声言語医学』日本音声言語医学会，56(3)，226-235.
平賀瑠美（2021）「聴覚障害者の非言語音聴取向上に関する研究―オンラインによる音楽聴取の時間計測実験について―」『筑波技術大学テクノレポート』筑波技術大学学術・社会貢献推進委員会，1，69-71.
松原正樹，寺澤洋子（2022）「聴覚障害と音楽認知」『日本音響学会誌』一般社団法人 日本音響学会，78(12)，724-729.
松原正樹，狩野直哉，寺澤洋子，平賀瑠美（2016）「聴覚障害者向けタッピングゲームにおける視覚手がかりによるリズム認知の短期的学習効果」『情報処理学会論文誌』情報処理学会，57(5)，1331-1340.
松原正樹，Hansen Kjetil，寺澤洋子（2014）「聴覚障害学生の聴能向上のための音楽トレーニングプロジェクト」『電子情報通信学会技術研究報告 信学技報』電子情報通信学会，114(52)，111-115.
松本紗知，湯浅哲也，加藤靖佳（2020）「聴覚障害者の音楽におけるメロディ認知に関する研究―メロディ認知能力の特徴及び音楽経験との関連性の検討―」『ろう教育科学：聴覚障害児教育とその関連領域』ろう教育科学会，62(2)，53-68.
森弘文，加藤靖佳（2015）「聴覚障害児が音楽授業場面で感じる楽しさについて」『ろう教育科学：聴覚障害児教育とその関連領域』ろう教育科学会，56(2)，69-81.
山口正紘，井坂行男（2022）「通常の学校における聴覚障害児と音楽科の授業について―聴覚障害者の語りからの音楽に対する意識の分析―」『大阪教育大学紀要　総合教育科学』大阪教育大学，70，269-280.
山本カヨ子（2017）「聾学校小学部における音楽科の指導―ことばとともに―」『ろう教育科学：聴覚障害児教育とその関連領域』ろう教育科学会，58(4)，183-198.
湯浅哲也，中村初音，加藤靖佳（2021）「聴覚障害児における小学校・小学部での音楽授業の楽しさの要因に関する検討―聴覚特別支援学校中等部・高等部生徒を対象にした質問紙調査を通して―」『聴覚言語障害』日本聴覚言語障害学会，50(2)，53-65.
吉田イツ子，喜多村真弓，矢﨑夏枝，嶋﨑法子，加

藤弘美（2019）「高度視聴覚障害を伴った重症心身障害児における行動観察からみえてきたもの」『日本重症心身障害学会誌』日本重症心身障害学会，44(2)，469.

若林泰志（2021）「おかしくなった手話歌をただす」『Japanese Journal of Sign Language Studies』日本手話学会，30c(2)，61-64.